

(最終講義) 私の国語教育の歩み―詩教育を中心に

足立悦男

はじめに

国文学会には、国語研究室の卒業生の皆さん、在校生の皆さんがご集まりですので、今まであまりお話しすることのなかった、私自身の国語教育の歩みを、詩教育を中心にふりかえってみようと思います。

一 現代詩の授業

『中学・高校 現代詩の授業』（文化評論出版 一九七八）は、私の二〇歳代の授業記録集です。当時、中学・高校で個人の詩の授業記録はたぶん初めてであったと思いますが、それも現代詩の授業であったこともあって、いろんな反響がありました。私の教材化した現代詩で授業してその記録を送ってくださいました方もありますし、後に教科書に採録された詩もあります。

当時の授業をいくつか取り上げてみます。「地下鉄」の授業（中学一年）というのがあります。この本の中でも一番話題になったもので、現代詩の授業の面白さを多くの先生方に知っていただいた授業だったと思います。私の授業論でいいますと、「詩と出会いながら」という授業方法です。

( )

坂本越郎

私は毎日棺に入る

見知らぬ人といっしょに

私はあわただしく釘をうつ

自分の棺に

そうして 都会の方へ  
生き埋めにされに行く

この詩の題名を伏せておいて、題名を当てるという授業です。一行ずつ板書して、みんなでそのイメージの変化を楽しみます。一連の一行を板書すると、何かこわい、ドラキュラみたい、棺桶を風呂代わりに使っている人、棺桶屋の人（背丈を測るために入っている）など、いろんなイメージがでて笑いを誘いました。「入ってみたい人？」と聞くと、一人もない。いろんなイメージがでるのは、なぜだと思う、と聞くと、「毎日」という言葉があるからだという。読者の違和感を生み出す言葉です。二行目を板書すると、ええっ、という反応になった。つづいて、二連、三連と板書し、詩の全体が見えるようになる、生徒たちのイメージはある方向性を持つようになります。

そこで、題名当てクイズになると、車、タクシー、通勤、バス、電車……と出て、誰かが「地下鉄」と叫んだ。題名に地下鉄を入れて一連ずつ読んでいくと、今度はすつきりと理解できます。都会の郊外の地下鉄は地上から地下に潜っていく。毎日の地下鉄通勤の大変さを「棺」にたとえた詩であることがわかってきました。

この授業には、詩のイメージの多様性、相関性ということを体験的に理解させる、というねらいがありました。

詩のイメージは最初の方では多様に出てくるが、終わりになっていくと、イメージ相互の相関性から、題名に向かって絞られていく、という詩の構造の学習です。

このように一つの詩を扱うときもありますが、複数の詩を同時に教材化し、その中から気に入った詩を選んだ生徒でグループを作り、詩の意味を追究する、という授業もあります。アンソロジーの授業と名付けた詩の授業方法です。この方法で、高校では、たとえば、次のような現代詩を教材化しています（高校二年）。

かくれんぼ

嶋岡 晨

木の中へ 女の子が入ってしまった

水たまりの中へ 雲が入ってしまうように

出てきても それはもうべつの女の子だ

もとの女の子はその木の中で

いつまでも鬼をまっっている。

女子生徒に人気のあつた詩です。この詩を選んだ生徒たちは、次のように読んでいきました。インベーダーみたい。ただのかくれんぼではない。鬼って何だろうか。木の中にいたい自分と出たくない自分がある。木の中の女の子は清純なままで、出ていった女の子は成長、など。生徒たちは、出て行った女の子に成長を読み取っていきますが、木の中で鬼を待っている女の子に、出ていっ

た女の子の残していった純真なものをみて好感をもつようになります。木の中の女の子の待っている鬼とは何かも話題となったが、怖い鬼ではなくて、女の子にとつてとても頼りになる鬼で、自分にもこんな人がいたらいいな、という生徒の意見は共感を呼びました。女の子にとつて成長とは何か、ということを考えさせてくれる作品です。

ふと

藤富保男

ぼくは時々ベンチに坐つて考え込む

あのこと を

ぼくは その時いつも

ぼ と く になつてしまうのである

ぼ

が坐つていて

く

が立つていて

二人で口を開けて月を見ていることがある

(以下、略)

男子生徒に人気のあつた詩です。「あのこと」とは何か、そこに読みの多様性がうまれます。そして、「ぼく」が「ぼ」と「く」になるところで驚き、生徒たちの

イメージは多様に自由に展開し、おもしろい授業になりました。「ぼ」と「く」は「ぼく」の分身で、「ぼ」が勉強しているとき、「く」は遊べる、とか、二人になると不安だなど、結局は自分とは何か、という話題になつていきました。

「かくれんぼ」も「ふと」という詩も、現代詩の方法によつて、自分とは何かという問いに読者を導いていくような作品なので、教材に向いています。

私の現代詩の授業では、その他、以下のような作品を教材にしました。中学校では「鏡」(高野喜久雄)「彼ら笑う」(石川逸子)谷川俊太郎の詩、みつはしちかこの詩画集、井上陽水のフォークソングなどの授業。高校では「伝説」(会田綱雄)「I was born」(吉野弘)「愛の招待」(安水稔和)「かくれんぼ」(嶋岡晨)「戦争ごっこ」(加藤八千代)「墓」(宗左近)などの授業です。

当時、なぜ、現代詩なのか、という質問をよく受けてきました。それには私が「測量船」事件と大げさによんでいる、ある出来事があります。教師の一年目、教科書の詩の単元は「測量船」(三好達治)の四編(春の岬、乳母車、雪、贅のうへ)でした。有名な詩集の有名な詩ですが、私にはどこか教材としての違和感がありました。指導書には作者のくわしい紹介と、一語一句のくわしい解説がありました。おそらく近代文学の専門の方が書かれていたのだと思います。そして、多くの教室では、こ

の指導書どおり詩の解説がなされていたのだと思いません。そこには、私の読みや生徒の読みの介在する余地がほとんどありません。当時の教科書は近代詩の有名な作品が多く載っていましたので、その頃の中学・高校の詩の授業は、指導書の解説的な授業が多かったのではないかと思います。そこで、私は、詩の授業を現代詩中心に切り替えたのでした。

現代詩は指導書のない世界です。そのメリットは、作者の無名性、教材の多様性、そして、生徒の読みの生成ということにあると考えていました。本書のあとがきで私が「教えない詩の教室であった」と書いているのは、「教える近代詩」を意識しての言い方です。とにかく、有名な近代詩と違って、現代詩は「詩のことば」だけが頼りですので、「読む」という行為によって、詩を出現させていくことになります。そのおもしろさが現代詩の授業の魅力でした。

『現代詩の授業』（一九七八）を出版したのは、大阪教育大学に転任してまもなくでしたが、その数年後に、明治図書書の江部満編集長から、「国語教育実践理論全書」の執筆依頼がありました。学会の若い研究者による書き下ろしの企画でした。その一冊目を私にお願いしたい、というお話でした。執筆期間は一年ということでしたので、既発表の論文も入れて刊行したのが『新しい詩教育の理論』（明治図書 一九八三）ですが、その年の学会賞（国語教育学会石井賞）を受賞しました。私にと

って、詩教育の理論を考える上で、とても意義のある著作になりました。この本に収録した現代詩の授業では、「するめ」（川崎洋）の授業（大阪教育大学附属中学校二年）「醜仮庵」（荒川洋治）の授業（大阪教育大学一年）などがあります。

私はこの著作で、鑑賞指導論を批判し、ものの見方・見え方を重視した「見方の詩教育」という考え方を主張しました。当時の常識であった鑑賞指導の考え方を批判した、ポスト鑑賞論の主張であったので、当然、反論の出ることを予想していました。

出版の前に、江部さんから雑誌の特集でとりあげましょう、というお話があつて、私の理論の検討の場を作っていたことになりました。「詩の授業は鑑賞指導だけでよいか」（『教育科学国語教育』一九八三年六月号）という特集で、私の提案に対して、関口安義、宇佐美寛、大西忠治、大河原忠蔵、安藤操、菅邦男の先生がたが率直な意見を述べてくださいました。宇佐美寛先生とは、のちに「夕焼け」（吉野弘）「故郷」（魯迅）「一つの花」（今西祐行）などの文学教材をめぐって激しい論争をすることになります。宇佐美先生は道徳教育の立場から、私は文学教育の立場からの論争でしたので、道徳教育・文学教育論争と呼ばれています。実はこの論争を、韓国の学者の方で読んでおられた方がおられて、私は後に韓国の学会に招かれて講演することになります。これもまた不思議な縁だと思えます。

## 二 異化の詩教育学

大阪教育大学から島根大学に転任したのは、ちょうど四〇歳のときでした。島根大学に来てからは、本格的に詩の理論の研究をはじめていきます。数年かけて、外国の詩論を集めてノートに取りながら、私のそれまでの実践理論に対して方向性を見出すような詩学・詩論を求めていました。そして、外国の詩学・詩論研究の中で異化論という文学理論に出会い、「異化の詩学・異化の詩教育学」という詩教育学を作り出すことになりました。「詩教育の体系化に関する研究―異化・変容・生成の詩教育」

(広島大学 一九九六) という博士論文にまとめました。理論形成においては、シフロフスキー、ブレヒト、ブロッホの異化論、バシュラール、ロダリーの想像力論、トドロフ、スコルズ、ホルブ、クリステヴァの文学理論などです。中でもシフロフスキーの異化論、クリステヴァの意味生成の詩学など、そして西郷文芸学の詩論が理論形成の大きな支えになりました。

異化とは芸術理論の一つの概念で、日常の非日常化とか、見慣れたものを見慣れないものにする、のように定義されています。私の詩学では、その異化の現象にイメージの変容、新しいイメージの生成を加えて理論化しています。島根大学の研究紀要(教育学部)に学位論文の主要な論文を発表していますので、関心のある方は

お読みいただければと思います。

私の詩教育学をふりかえってみますと、はじめに理論があつて、その理論に基づいて実践してきた、というのではなく、実践が先行していました。その自分の実践を理論的に意味づけようとして、『新しい詩教育学の理論』(一九八三)になり、学位論文にまとめた「異化の詩教育学―異化・変容・生成の詩教育」(一九九六)になったように思います。

ここで、この理論を考えていた頃の大学の授業を一つ、ご紹介します(島根大学三年)。私の授業論でいうと、「詩と出会ったあとで」という授業方法です。

ライオン 工藤直子

雲を見ながらライオンが

女房にいった

そろそろ めしにしようか

ライオンと女房は

連れだつてでかけ

( ) 縞馬を喰べた

この授業は、( )の中に、どんな言葉が入ると思えますか、という、たった一つの問いによるものです。しばらく考えてもらつてから、(しみじみと)と書き入れ、(しみじみと)という言葉との出会いを感想として

発表する、という展開です。学生たちは、次のような感想を述べています。

・空欄の部分に、「しみじみと」が入ったのは、びっくりした。ライオンは私のイメージでは、こわくて力強い感じがするので、もっとライオンらしい言葉が入るのでは、と思っていた。しかし、このライオンは、やさしさがあり、女房という言葉があるように、人間のようなライオンだなと思いました。

・「喰う」という言葉から「がつがつ」が一番いいと思っていた。まさか、「しみじみ」だったとは……。この「しみじみ」だけで、この詩の印象が変わった。怖い、凶暴なライオンが、急に、さみしげな、やさしい感じに見えてきて、しまうまを喰べていることも当然のように思えた。言葉ってすごい力をもっていると、今更ながら感動した。

・最初に「がつがつ」を考えた。でもよく読んでみると、全体的にやわらかく、あたたかい感じがあって、「がつがつ」では浮いてしまうことに気づいた。空欄に「しみじみ」が入ったときに、文の全体に安定感が生まれたと思った。「しみじみ」というたった一語で、あたたかい夫婦の印象が強くなった。言葉って本当に不思議だと思った。

このように、多くの学生の感想に、言葉の不思議さ、

言葉の力を実感したことが述べられていました。詩の世界に「しみじみ」という一語が介入することにより、一気に非日常の、見慣れない情景になり、その後新しいライオン夫婦のなごやかな日常の情景が生まれていく、というイメージの変容・生成を、学生たちは実感したのだと思います。

### 三 西郷文芸学の研究

西郷文芸学との出会いは、ほんの偶然からでした。大学四年生の一二月、あと一月後に、卒業論文の締め切りが迫っていました。そしてある日、大学前の本屋さんに立ち寄り、文学書のコーナーで本を探していたところ、『文学教育入門―関係認識・変革の文学教育』（西郷竹彦）という一冊に目がとまりました。副題に興味をもち、棚から出して読み始めたらずまらず、じっくり読みたいと思い購入しました。もし、この一冊が本来の教育書コーナーにあつたら、もし別の文学書を手にしていたら、それから長く続く、私の西郷文芸学研究は存在しなかったかも知れません。縁とは実に不思議なものだと、つくづく思います。

大学院（修士課程）の二年間は、野地潤家先生、大槻和夫先生に指導を受けました。野地先生には国語教育史研究の方法について学びました。大槻先生からは教育方法学について学びました。私の西郷文芸学の研究は、大

学院でお二人の先生に学んだことが研究の基礎になっています。その後、私は中学・高校の教育現場において、現代詩の授業に打ち込むようになりますので、西郷文芸学の研究はしばらくできませんでした。

ところが、三〇歳の時に大阪教育大学に転勤して、しばらくして、西郷先生から、西郷文芸学について『文芸教育』に連載してもらえないか、というお話があつて、驚きました。修士論文のストックは少なく、全く新たな論文で連載をスタートさせました。連載は十一回続き、『西郷文芸学の成立と展開』（明治図書 西郷竹彦文芸教育著作集別巻 一九八二）という本になりました。この連載をきっかけに、『文芸教育』誌によく執筆するようになりました。担当編集者の庄司進氏とは同年で、その後の西郷先生の著作と一緒に編集するようになります。『文芸教育』誌には、『現代少年詩論』（明治図書 一九八七）、『研究・文芸研の授業』（明治図書 一九九三）となった著作や、宇佐美氏との論争「文学教育批判を斬る」の連載など、ほとんど毎号のように執筆するようにになります。文芸研とは、西郷先生が代表の民間教育団体であり、正式名称は文芸教育研究協議会です。年一回の文芸研大会では、よくシンポジウムの司会を担当しました。大会のメインイベントは西郷先生の公開授業です。小学生を相手の詩の授業が多かったですが、その後の授業をめぐるシンポジウムでは、いつも西郷先生の授業を俎上にあげて、活発な議論で会場が沸きま

した。控え室で大会講師の河合隼雄さん、野坂昭如さん、立松和平さんなどから伺った興味深い話も印象に残っています。

また、西郷先生の授業記録集（全五巻 一九八七〜一九九一）を編集し、巻末の解説や対談をしたことは、西郷先生の授業理論を知る上で、本当に参考になりました。そしてそれは、私自身の授業論を作り上げていく、すぐれた臨床研究の場でもありました。

雑誌の対談などで、西郷先生の授業論を伺うことも多くなりました。その中で、「羅針盤と海図」の話は今でもよく覚えています。教師は荒海に乗り出した船長のようなもので、授業の「ねらい」が羅針盤で、これさえしっかりしていればどんな荒波でも乗り切れる。そのためには海図（教材）の綿密な分析が必要であり、また、どのコースをたどっていくか、そのコースが「めあて」である。 「めあて」は教材の特質によって、子どもの実態によってそのつど変えていくことになる、と。西郷先生が多くの実験授業において見出された授業哲学だと私は思っています。また、ある授業の前に、「足立さん、今日の指導案はこれ」と言つて見せていただいたのは、教材（詩）に数本の線が引いてあるだけです。一本一本の線に教材研究のすべてがこめられている、そういう力強い線でした。

私は、西郷先生の前で、一度だけ授業したことがあります。明治図書に依頼されて、西郷先生の『文芸の授業

入門」(一九八七年)という本を編集するために、福岡県小郡市の大原小学校に出向き、五日間、西郷先生の「わらぐつの中の神さま」の全授業(十五時間)に立ち合い、授業を見学したあとで、授業をめぐる対談をし、その全記録を本にしたことがあります。

その三日目だったか、西郷先生が「足立さんも授業をしてみませんか」と言われて、思わず「ええ」と言ってしまったのです。そして翌日、校内研修として先生方の前で授業をすることになったのです。小学校では初めての公開授業でした。私は、次の詩を選びました。

草 小二 なかもと くにご

草って 強いな。

だって、何もしないでも、

すくすく のびている。

草は、

自分で 自分を そだてている。

私も編集に参加していた教育出版の教科書に載っていた児童詩です。いい詩だなあとと思って、記憶していたのです。

授業は、詩を紹介しないで、「今日は、比べて考えてみましょう」という勉強です、と言って、「草 やさい花」と横に板書しました。そして、「この中で、食べら

れるものはどれですか」「美しいものはどれですか」「人間に役立っているものはどれですか」と、順に質問していきました。すると、やさいや花は○が付くところがあるのに、草だけは全部×になりました。これには子どもたちも驚きました。草は人間にとつて何の役にも立たない、ということになったからです。子どもたちの発言で活気のある教室が何となく沈んでいきました。

そこで、詩の登場です。「草にはみんな×が付いたけど、大丈夫です」「ある小学生が、草に○を付けた作文を書いているので、今から黒板に書きますね」と言つて、一行ずつ、ゆっくりと板書していきました。子どもたちはどんな作文だろうと興味しんしんです。一行ごとに子どもたちは「そうだな」という納得の表情になりました。そして最後に、みんなで元気よく音読して終わりました。

私の授業論でいいますと、「詩と出会う前」という授業方法です。西郷先生が「いい授業でしたよ」と言われたこともあって、印象に残っている授業の一つです(拙著『研究・文芸研の授業』明治図書、一九九三年に収録)。

私はこの同じ詩を、翌年、大阪の小学校六年生に授業したことがあります。六年生なので、授業のねらいを「想像力―見えてないものを見る力」としました。この詩を板書したあと、「この詩の中で、目で見えるものと、目には見えないものに分けてみましょう」という問題を



追究していきました。すると、子どもたちの話し合いは、実際に目に見えているのは前半の三行だけで、後半の二行は、目には見えないことを作者が想像した、想像してて発見したこと、ということになりました。こういう授業です。

この二つの授業は、同じ教材を使っています。教科書の教材は学年がきまっていますが、たとえば「ごんぎつね」は四年というふうには。しかし、教材というのは、授業のねらいによって、教材価値は変わってくるのではないかと、ということを実験的に考えてみたかったです。こういうことも、数多く立ち合った西郷先生の実験授業から学んだことのように思います。

#### 四 西郷竹彦全集の編集

西郷文芸学の研究では、その後、全く予測していなかった、大きな出来事が待ちかまえていたのです。

ある日、西郷先生から電話があり、今度全集を出すことになったので、その編集をしてほしい、という話です。お引き受けするかどうか、私は悩みました。全集のスケールの大きさからみて、とても私一人でできるような仕事ではないと思ったからです。でも、西郷先生は、私一人に全巻の編集を任せたい、と言われるので、お引き受けすることになりました。学部の管理職をしていたときなので、時間的にはとても厳しい状況でしたが、西郷文

芸学との出会いといい、全集の編集といい、何か運命的な縁を感じていました。

さて、それからが大変です。私の人生で、これほど責任のある、これほど集中した時期は他にありません。それから、準備期間の半年をふくめて四年間、休みのない編集作業が始まったのです。版元(恒文社。小泉八雲全集を出している出版社です)の方では、岩井弘さんという若い有能な編集者が全集の担当となりました。

私がまず始めたことは、体力作りのジョッキングです。何しる準備期間を入れて四年間の長丁場で、しかも一人だけの編集作業となると倒れるわけにはいきません。本当に翌日からジョッキングを始めたのです。おかげで全集が完結したときにはすっかり体力がついていました。全集のおかげです。自宅の離れの書斎の一部屋と大学の研究室を編集室とし、専用の電話・FAXを入れて恒文社の岩井さんと結び、そして、毎日のように岩井さんと連絡を取り合って四年間の長きに及ぶ編集作業が続きます。全集の編集作業は、およそ次のように進めていきました。

一 巻分(五〇〇頁)の原稿をまとめて出版社に送ります。一巻分といっても計算上のことなので五〇〇頁になるとは限りません。足りないかと補足していきますし、オーバーしていると減らしていきます。そして、初稿ゲラで五〇〇頁を確定していきます。一巻分の原稿を送ると、先月入れた巻の初稿ゲラが出てきます。初稿ゲラのチェックが終わると、先々月の再校ゲラが送られてきて校正

が始まります。こうして、毎月、一卷分の原稿を入れることと、前巻の初稿ゲラ、前々巻の再校ゲラの校正をしていきます。私の方と出版社の岩井さんの方とで同時に進めていて、ひんばんにFAXでやりとりをして正確を期します。明治図書の本庄さんにも、明治図書の著作、雑誌の論文が多かったので、そのつど原文を確かめてもらいながら手助けをしていただきました。

編集作業の四年間を経て、最終巻が出たときには感無量でした。今ふりかえってみますと、全巻ほぼ五〇〇頁になって、三六冊を並べると、本棚に三段ほど整然と並んでいます。

全集には解説と解題を付けました。各巻の解説の人選は西郷先生から任されていきましたので、当時の若手の研究者に依頼しました。西郷先生の著作に解説を書くことは、けっこう大変なことだったと思いますが、依頼した全員に書いていただくことができました。

私の方は全巻の解題を担当しました。収録した各論文の出典と、論文の位置づけ、意味づけを明らかにしました。一つ一つの文献を精査し、その文献のその巻での位置を確定する仕事です。厳密な資料の吟味をともなう文献学の研究であったと思っています。

全集の最後の巻（別巻Ⅱ）は、私の『西郷文芸学の研究』（恒文社 一九九九）という著作です。前著の『西郷文芸学の成立と展開』（明治図書、一九八二）をベースに、それ以後の論文を加えて、私の西郷研究の決定版

になった著作です。

西郷先生は、この著作について、「本書において足立氏は、内外の文学・教育界の諸理論の動向と対応させつつ、西郷理論の体系化の足取りをたどっておられます。ひたすら目の前の課題・テーマを追究してきて、他をかえりみることのなかった私にとつて、本書は、私の思想・理念が次第に形を成していくさまを対象化することができ、私自身、何よりもありがたいと思います。一粒の種子が芽を出し、根を張り、枝をひろげていく西郷理論の形成過程が、繊細にして鋭利な氏の筆致で鮮明に描出されていて、いわゆる世の研究書なるものとはちがった、劇的な体験を読者に与えてくれます」（序文）と述べておられます。著者としてこれほどうれしい書評はありません。

#### 四 日韓比較文学教育

一九九六年の秋、私は韓国の学会（第二十回語文教育学会）に招待されて、「日本の文学教育の現状と課題」と題して講演を行っています。会長の千斗鉞先生のご推薦であったとお聞きしています。千先生は以前、宇佐美先生と私の論争を読んでおられて、私の論文・著作に興味をもっておられたそうです。千先生とはそれ以来親しくなり、何度か韓国でお会いしています。

さて、その講演のはじめと終わりで、私は金子みすゞ

の詩を引用しました。「大漁」と「わたしと小鳥とすずと」の二編です。「大漁」については、目に見えている浜辺の大漁の様子だけでなく、目には見えない海の中のとむらい（葬儀）の様子まで想像している。そこに作者の悲しみを思いやる、やさしい想像力があります。また、「わたしと……」の詩では、「すずと、小鳥と、それからわたし／みんなちがって みんないい」。わたしも小鳥も、鈴も、みんな違っていいから、みんないい。そのような考え方こそ、今の世界の子どもたちに欠けている、大事な考え方なのではないかと思う。文学にはそういう大事なメッセージを伝える役割があると、私は考えています、というような話をしました。金子みすゞの詩はまだ韓国で訳されていないなかったので、大きな感銘を呼んだ、とお聞きしました。

講演のあと、お茶を飲みながら歓談していたとき、通訳をしてくださった千先生に、講演で引用した金子みすゞの詩集をお贈りしました。教科書編集で一緒にしている、矢崎節夫氏（金子みすゞの発掘者）にいただいた署名入りの詩集です。千先生はいつか訳してみたいと言われてました。

そういうご縁もあって、私は次第に韓国の文学教育にも関心をもつようになります。その頃から毎年のように韓国からの留学生を大学院で指導しながら、一緒に韓国の教科書の文学教材を翻訳し、紹介するようになっていきます。大学院生の留学生、金京姫さん、鄭淳功さん、

申美熙さん、李普銀さん。そして韓国の昔話を研究した山本美千枝さんなど。中国の留学生、郭丹さんとは中国の教科書の詩を翻訳、紹介しました。留学生の皆さんとの共同研究は、その後、私の研究室の特徴となつていきます。

いくつか、私たちの翻訳した韓国の詩を紹介しましょう。

花のくつ

れんぎょうの きいろい

花かげの 下に、

ならんで おいてる

花のくつ ひとつ。

赤ちゃんは こっそり

くつをぬいで、

はだしで よちよち

出かけたよ。

ならんで まってる

花のくつ ひとつ。

小さくても

水たまりは小さくても  
どろがしずんだら、

空がうまれ

雲がうまれ

星がうまれる。

庭はせまくても

木をうえたら、

鳥がきて

せみがきて

風がくる。

### 古詩調

風よ 吹け、雨をよぶ風よ 吹け

小雨を 止めて 大雨を 降らせておくれ

大雨が 海になって 恋人を 行かせないように  
しておくれ。

韓国の小学校の国語教科書（二〇〇〇年）に載っている詩です。韓国の詩を留学生と訳しながら気づいたこと

ですが、韓国の教科書には非常に多くの詩が載っています。各学年に十〜二十編も載っています。日本の教科書には二〜三編ですから、韓国では詩を大事に扱っていることがわかります。そして、内容的には自然を歌った詩が多いです。「花のくつ」「小さくても」もそうですし、古詩調（三行の定型詩）もそうです。技法的には比喻を使った作品が多くみられました。

中学校の詩になると、「論介」（卞榮魯）などの愛国心、「自画像」（尹東柱）などの抵抗詩人の作品が載っています。また、古詩調の詩はどの学年にも載っています。詩調とは、朝鮮時代の歌曲の様式の一つで、朗詠するための定型詩です。日本でいえば万葉・古今・新古今などの和歌にあたります。伝統文化を重視していることがわかります。

### 五 釜山教育大学の集中講義

二〇〇〇年の十一月には、釜山教育大学で四日間の集中講義を行いました。島根大学との提携・交流協定の企画の一つで、第一回目は私と藤井浩基先生（音楽）が釜山教育大学で講義し、翌年の一月、今度は釜山教育大学の周康植教授（文学）、朴鐘源教授（音楽）が島根大学で講義されました。この交流は五年間ほど続きました。

私の講義は「日本の文学教育」として、日本の小学校の文学教材をテキストとしました。三日間の日程と教材は、以下のとおりです。

- ① 日本語レッスン かえるのびよん くじらぐも
- ② 日本語レッスン まど・みちおの詩 おおきなかぶ
- ③ 日本語レッスンのはらうた へらない稲東
- ④ かえるのびよん かっぱ 三年とうげ
- ⑤ こゆび にんげんだもの かきこじぞう
- ⑥ 「おちば」の授業（附属小学校五年）
- ⑦ おちば にんげんだもの まど・みちおの詩

テキストは、日本語にハングルのルビをふり、韓国語訳を付けました。同じ教材があるのは、参観されていた先生がたがその教材をリクエストされたからです。中でも、まど・みちおの詩と、「かえるのびよん」（谷川俊太郎）は、学生たちの人気を集めました。いくつかの詩について、学生の感想を紹介してみます。

のみ まど・みちお

あらわれる  
ゆくえふめいに なるために

・消えてゆくために存在する、すべてのもの……。短いこの言葉の中に、生の道、生の哲学があるようだ（イ・ゼミョン）

みみず まど・みちお

ようふくは ちきゆうです

オーバーは 宇宙です

ーどちらも

一まいきりですが

・詩の着想がすばらしい。どうやって小さなミミズをみて、地球を、宇宙を思いつくことができるのだろうかと思いました。一つの物事をみながら、その裏にある本質的な面を見つめる詩人の目がうらやましい。（キム・ウンジュ）

これら韓国の学生の鑑賞文をみると、国は違っても、まどの詩の受け止め方は変わらないな、と思います。そして、国を越えて読者を感動させる詩人の言葉の力に、改めて注目したくなります。

まど・みちおの詩の世界は、実は、私の「異化の詩教育学」の有力なテキストとなりました。私の『現代少年詩論』（一九八七）の中に、「日常の狩人ーまど・みちお論」という論文がありますが、その頃から、まどの詩

に、見慣れたものを見慣れないものに変容させる、という異化の現象を見出しています。まどの詩では、資料にありますような「いちばんぼし」「リンゴ」「どうしていつも」「つぼ」「空気」「火事」など、多くの作品を私の詩教育論のテキストとして使用してきました。

まど・みちおの詩は、ひらがなの作品が多く一年生でも読めるのですが、その詩の世界の奥深さは、年齢に関係なく感動を呼び起こします。題材は誰でも見ているものなのに、まどさんは、誰も見えないような詩の世界を作り出し、読者に新鮮な感動を与えてくれます。

また、谷川俊太郎の「かえるの ぴよん」は、学生たちのもつとも人気をあつめた詩です。

かえるの ぴよん 谷川俊太郎

かえるの ぴよん／とぶのがだいすき

はじめに かあさん とびこえて

それから とおさん とびこえる

ぴよん

かえるのぴよん／とぶのが だいすき

つきには じどうしゃ とびこえて

しんかんせんも とびこえる

ぴよん ぴよん

かえるの ぴよん／とぶのがだいすき

とんでる ひこうき とびこえて

ついでに おひさま とびこえる

ぴよん ぴよん ぴよん

かえるの ぴよん／とぶのがだいすき

とうとう きょうを とびこえて

あしたの ほうへ きえちやつた

ぴよん ぴよん ぴよん ぴよん

この詩については忘れられない思い出があります。附属小学校の校長となった最初の入学式で、一年生へのお祝いとしてこの詩を朗読したときのことです。連を追うごとに、ぴよんの飛び越えるものに驚いたのか、二年生、三年生とざわめきが広がり、最後の連を読んだときには会場全体に驚きの声があがっていました。そういうエピソードを話した後で、日本語のルビ（ハンゲル）による音読を楽しみました。最後は学生たちの「ぴよん ぴよん ぴよん ぴよん」の大合唱になりました。

授業をみておられたイ・ムンギユ先生（音韻学）に翌日の自分の授業でもこの詩をテキストにしてほしい、と依頼され、この詩は二度のテキストになりました。二度目の授業が終わったとき、二、三人の学生がやってきて先生、シン君がかえるのピヨンになりました、と笑いながら話しました。授業の途中で消えた、ということらし

いです。

「おちば」の授業は、親しくしていた附属小学校の朴吉弘校長から依頼を受けて、小学校五年生に行った授業です。大学の特別ホールで行われました。

おちば　みつこし　さちお

おちばを　ことりにして

そらへ　とばしたのは

(いたずら　きたかぜ)

おちばを　ふとんにして

はるまで　ねるのは

(山のどんぐり)

おちばを　さらにして

ままごと　するのは

(ふたりの　いもうと)

おちばを　しおりにして

(ぼく)は　ほんの　あいだに

( )を　しまいます

教材の下には、( )の中に入る四人の人物一覧が示してあります。授業は一連ずつ( )の中は誰でしよ

う、と問いながらすすめました。私の授業論でいうと、「空白を読む」という授業方法です。

五年生の子どもたちなので、空欄を埋めるのはそんなに難しくはなく、どの子どもたちも四連とも正解です。最後に残ったのは四連の( )です。「ぼく」は本の間に(何を)しまったのでしょうか、という最後の問題です。

思い出という意見が多かったのですが、一人の児童が手を挙げて、秋と答えました。そうですね、作者は秋と書いています、と言うと、大きな拍手が起りました。あなたは詩人ですね、というと、その生徒はにこやかな笑顔をみせました。

その後、初めと同じように韓国語の音読でしめくくろうとすると、通訳の全允景さんが「先生、子どもたちは日本語で読みましたがっています」という。では日本語で音読しましょうか、というと、子どもたちは手をたたいて喜んでいきます。一行ずつ、私の音読の後に、子どもたちは日本語の下に付けたハングルのルビを読んでいくのですが、私には美しい日本語に聞こえます。日本語の音読が終わると、みんな大喜びです。

この「おちば」の詩は、午後の大学の講義でも取り上げてみました。ある学生は、こんな感想を書いています。

・一番記憶に残る詩だった。特に、おちばを本のしおりにして秋をしまう、というところで、周囲の小さいもの一つ、小さな出来事一つで、自分の人生がこんな

に温まつて豊かになれることがうれしかった。(イ・ソンハ)

この詩は大学生をも惹きつける詩であつたことがわかります。韓国の学生たちは、感想にみられるように、詩を倫理的、哲学的に深く受容しようとする傾向がありました。

集中講義が終わつた日に、周康植先生から招待されて、海雲台の近くの崖下に下り、岩の上の屋台で、海雲台の夜景を見ながら、取れたてのなまこ、ほやで焼酎を酌み交わしたことは忘れられない思い出です。翌年には周康植先生が島根大学に來られて、「韓国詩の伝統」という集中講義をしてくださいました。その講義の中で、受講生(国語研究室の学生)の一番人気は「花」という詩でした。韓国の中学校の教科書にも載っている詩で、韓国の学生たちの大好きな詩です。

最後に、この詩を紹介したいと思います。

花 キム チョンス  
金 春洙 (申美熙訳)

私はその人の名前を呼んであげる前には  
その人はただの  
一つの身振りにすぎなかつた。

私はその人の名前を呼んであげたとき

その人は私のところに来て  
花になつた

私はその人の名前を呼んであげたように  
私のこの色と香りにふさわしい  
誰かが私の名前を呼んでくれたら  
その人のところに行つて私も  
その人の花になりたい

私たちは皆  
何かになりたい  
私はあなたにとつて あなたは私にとつて  
忘れられない一つの意味になりたい

おわりに

島根大学の国語研究室には本当に長い間お世話になりました。国語研究室の先生がた、卒業生の皆さん、院生・学生の皆さん、ありがとうございました。

【本稿は、第二十九回島根大学教育学部国文学会(平成二十三年八月六日)で行つた講演をもとに加筆しました。】